



豊橋市の駅前を少し歩いて行くと、牟呂用水の上に鉄筋コンクリートの三階建てのビルが東西につながっている。町の人びとは、そこを「水上ビル」と呼んでいる。一階には、レトロな婦人服の店や駄菓子屋、文房具屋、八百屋、喫茶店などがひしめき合っていて、昭和の臭いがつまった商店街が並んでいる。

わたしは、この商店街が大好きだ。昔は、多くの人で賑わい随分栄えた商店街だったが今はシャッターで閉ざした店が多く、閑散としている。

その中に、「チャールズ」という古い喫茶店が一軒、いつ頃からだろうか、わたしがそこへ訪れるようになったのは。

ある時、商店街を歩いていると、ふと目にとまったその店は、「チャーハンのおいしい店」とかかれた看板が掲げてある。店のマスターは、50歳前後の無口で、無愛想な、顎鬚をはやし、少し色黒で胡散臭い感じの人だ。

あまり過去の話はしない彼に、わたしは、表浜のアカウミガメの話をしたことがあった。その時、「自分は、昔サーファーだね。よく仲間と東京から表浜にサーフィンをやりに来ていた」「それで、サーフィンに魅せられて、豊橋に住み着いてしまった」そして、

「今でも、休みの日は、時々海へ行っているよ！」と無口なマスターは、恥ずかしそうにぼそっと話してくれた。

マスターの作るチャーハンは、とてもなつかしい味がする。店を訪れるお客は、お年寄りが多く、マスターに色々な注文をつける。

しかし、どんな注文でもお手の物で、お客は、満足な顔をして、店を出て行く。

六月の雨は嫌いだ。外出するのも億劫になる。そんな中、チャールズへ行こうと思いをさして水上ビルを歩いていると、後ろから黒と白のブチ猫がわたしの跡を追いかけるようについてくる。わたしが立ち止まると、電柱に隠れてしまう。また、歩き出すと、雨に濡れながらフラフラとついてくる。

チャールズの店のドアを開け、店に入ると、その猫はドアをすり抜けてお店に入ってしまった。

「あれ？今日はお友達を連れてきたの？」とマスターに言われ、ふと隣を見ると、その猫はカウンターの前の椅子にちょこんと座り、雨にひどく濡れたせいか震えている。

「あら、この子お腹が空いているみたい」

「何か食べるかなあ？」と猫が店に入ったことをとがめるわけでもなく、心配しているマスターに、ちよつと感心してしまった。

「じゃあチャーハンを作ろうか」と無口なマスターは、珍しく楽しそうにシーチキン入りチャーハンに鰹節を載せて、わたしと猫の前に置いた。すると、猫はクンクン臭いをかいで、しばらく見つめていたが、チャーハンをがつつ食べ始めた。それを見ていたマスターが、「この猫の名前、チャーハンにしよう！」

「面白い名前だね！」「よかったね、チャーハン」とわたしは、笑いながらチャーハンの頭を撫なでながら言った。

それから、チャーハンはお店の看板猫になった。チャールズのドアを開けると、首に蝶ネクタイの首輪を付け、「いらっしやいませ」と言っているような鳴き声で、お客様の相手をしてくれる。お年寄りにも大人気。マスターは、以前より明るくお客さんとも気軽に話をするようになった。それから、チャーハンは水上ビルの看板猫になり、今日も大繁盛だ。

皆さんも、一度レトロな商店街の、このお店にお越しになりませんか。

瞳、シャツターを切る 加藤まり恵



僕は鏡の中の住人である。見慣れないお客さんが座っているな。僕をなかなか見ないな。新規のお客さんかな。

美容師に声を掛けられると彼女の力の入った肩がスツと落ちた。

ああ。こんなにも美容院に行かなかったことはなかったな。こんなにも髪が伸びて。前に染めたところからの境界がはつきりとしすぎ。恥ずかしい。いつも行く美容院にこんな状態だと行けないから、お祖母ちゃんに教えてもらったここに来てみたけれど。ああ。こんなにも。

僕の悪い癖。新規のお客さんがとても気になる。少し寝癖が残っているな。うーん。さつき起きたところかな。化粧はさっぱりとした感じなのかな。チークをさつと塗っているから笑うとフワツとした雰囲気に含まれるな。あ、僕を見た。こんにちは。僕はkです。あなたは？ なんて声を掛けても、聞こえないのはわかってるよ。ふーんだ。

鏡越しに、本日の髪型の注文を美容師にすると、再び視線は落ち、手元の雑誌に注がれる。

注文もしたし、後は美容師さんにお任せしよう。最近、雑誌もろくに読んでなかったな。

美容師さんと会話とか……しなくて良いよね。美容師さん、お洒落な人だな。店内も明るい雰囲気、レトロな感じね。シャンプー？ いい匂い。

彼女の今日の髪型、レイヤーは入れずに重めにして……おっと。それは美容師さんが決めるよね。ごめん、ごめん。映している僕の話もたまには聞いてほしいよな。おーい。店内は前の小料理店の雰囲気が残る一方で、このお店のコンセプトを壊さないようにデザインされている。最近、徐々に新規のお客が増え、常連もついてきている。隣の席からはまた違った話が聞こえる。隣の人は美容師さんとずっと喋っているな。私はこのまま。このお店の雰囲気を楽しむの。雑誌も読みたいし。

羨ましい。旅行か。僕もどこか遠くへ行きたい。思えば生まれてからこの店の鏡を渡り映っているだけだな。いや、そんな退屈じゃないよ。美容院の前のお店、小料理店の時なんかは、いつも仕事帰りのおっちゃん達の真つ赤な顔を映していたな。僕は、出入り口付近に居たっけな。聞こえてくる家族の話、仕事の話、趣味の話。悲しい話は一緒に泣いたし、くだらない話は大笑。これはこれで楽しんでた。ま、良いか。今の店になってからは、真つ赤な顔のおっちゃんからガラッと変わって、若い女性や主婦ばかりを映している

な。でも、僕は楽しんでるのだ。彼女たちの姿を映していると見えてくるのだ。あの頃とはまた違った風景が。そして、髪を切り終わった後の凜とした表情の彼女たちをついつい僕は見てしまう。

カット、カラーリングが終わる。彼女はちらちらと鏡を見る。雑誌はもうめくっているだけで、読んではいない。

良いかな。良いよね。うんうん。変じゃないよね。好きな感じに仕上がった。満足。

僕は彼女を見た。

二人は微笑んだ。

私は鏡をまじまじと見た。

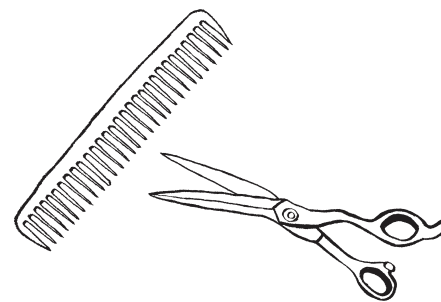
ああ、なんだ。奥さんのお孫さんか。

kは気付いた。

前髪久しぶりに切ったな。

家族とは不思議なものだな。どこか必ず似ている。その顔、その仕草。僕はあなたのお祖母さんを何年も何年も見ていたよ。彼女も僕をよく見てくれていた。だからはつきりと

覚えているよ。僕はあなたの顔をまた見ることが出来て。
今、光が跳ね返る。
お祖母ちゃんに素敵な美容院だったよって言わないと。



水上ビルのアコーディオン弾き

栗作武宏



僕が、その音を聞いたのは『喫茶キャロン』でバイトしていた時だった。

普段なら気にも留めないところだ。しかし、今回に限っては「何だろうな」と思い、外に出て確認した。店に面した狭い道路。左側を見れば、そこにはアコーディオンを弾く老年の男。そして、その後ろについていく大勢の人間の姿。老若男女問わず、ガヤガヤと楽しそうに行進していた。行進は僕の視界を横切る。はたで見えていた他の人も、吸い寄せられるように行進に加わっていった。気持ち悪いな、と思った。だが同時に好奇心も刺激され、ちよつとついていくことにした。幸い店は今、人が少ない時間帯だ。

「あの、すみません。これって何かのお祭りですか？」僕は近くにいた男性に訊いた。

「さあな。だが着いた先はとても楽しい場所らしい」と答える男性。

ならば一層自分の目で確かめてみたい、と思った。それから、どれほどの時間が経っただろうか。アコーディオンの音に合わせて、ドンチャン騒ぎが終わらない。いつの間にか僕も雰囲気にもまれ、はしゃいでいた。すっかり灰色の日常を忘れていた。ただただ平凡な日常もどこへやら。近くの人たちと子供みたいに、いつまでも騒いでいたかった。

そして、ふと冷静になると、僕は急に怖くなった。いつまでこうしていればいいのか

と。脳裏によぎったのは、小さい頃に読んだ童話だった。笛吹の男が村の子供たちを率いて、何処へと消えた話だ。子供たちはどこへ行ったか。今、僕はその子供たちみたいになる。そう考えただけで背筋に冷たいものが走った。戻ろう、と決めた。

「すみません、僕はこの辺で」

「そうかい。残念だな。まあ、あんたの勝手だがな」

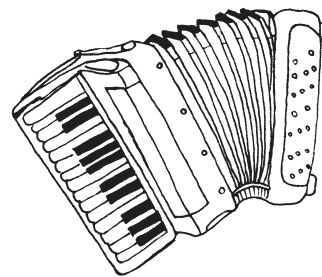
僕は行進から離脱し、人の連なりを見送った。来た道に戻ればいいはずだった。だが、そこは見知らぬ灰色の採掘場だった。三百六十度あたりを見回しても、人ひとりいる気配がない。スマホで現在地を確認するがGPSも電話も機能しない。呆然と立ち尽くし、膝を抱えてうずくまることしかできなかった。

——気の遠くなるような時が流れた。

僕は何とか立ち上がり、歩を進めた。何でもいい。とにかく進まねば。何もしなければ何も始まらない。歩け、歩けと己を鼓舞する。彼方の方に微かだが、光が見えた。心身と

もに疲れ切った僕は最後の力を振り絞って光のほうへと歩み寄る。光は肥大化し、やがて僕の身体を飲み込んだ。

ふと気が付くと僕は『喫茶キャロン』にいた。居眠りしていたようだ。しかし、夢オチとは。小説でいえば何のひねりもない禁忌タブーでしかない。この世界が小説でなくて良かった、と思い、ぐっと背伸びする。すると、店外から聞こえる音があった。アコーディオンの音だ。



友情シャープペンシルと日記ココロの色

海月岬



「君、大沢こずえちゃんだよ。僕、この店主なんだ。よろしく」
ここは、水上ビルにある文房具店の事務室。店主である叔父が話している。

「それにしても気の毒だったね。いっぺんにお父さんとお母さん、亡くしたんだろ」

そうなのだ。私は突然の事故により、両親を亡くしている。そこで、叔父に引き取られることになったのだが……。

「この辺は、僕の知り合いが多いからね。明日にでも紹介してあげるよ」

めんどろくさい。私は心の中で呟いた。知り合いなんていらない、人との関わりなんてなくていい。でも、そんなことを言うとお母に叱られたので、最近口にはださないようにしている。

「まあ、今日はもう遅いから寝なさい。明日は忙しくなるしね」

はあ。思わずため息をついた。きつと、知り合いの紹介で忙しくなるのだろう。だが、そんなことはしなくていい。露骨に嫌そうな顔で分かれ、とでも言ってしまうことになる。

でも、これからお世話になるし、迷惑をかけるわけにはいけないので、諦めて寝ることにした。

翌日。私にとって史上最悪な一日になった。

今日も露骨に嫌そうな顔をするものの、商店街のおばさんたちに囲まれ、

「あら、こんなに可愛い姪っ子がいるなんて知らなかったわ。こずえちゃん、よろしくね」

これが繰り返されるのである。そんな人たちとこれから付き合っていかなければいけないのだから、気が重い。

唯一私が落ち着ける時間、それは、日記を書く時間だった。今日一日にあったことを、一つも書き忘れないように書く。自分の悩みも、不安なことも全て。今日も私は、母の形見であるネギ型シャーペンシルを握りしめて机に向かっていた。しかし、思い出されるのは嫌なことばかり。それでも、仕方なくあったこと全てを書いたが、暗い日記になってしまった。明日は少しでも明るい出来事があればいいが……なさそうだ。私は水上ビルに来て、何度目か分からないため息をついた。

次の日から、やっぱり、明るい出来事は一行も一字も日記に書かれることはなく、暗

い日記でうめつくされた。綺麗なパステルピンクの表紙が、気付いたら真っ黒に染まっていた、なんてことがあるかもしれない。

そんな暗い日記を書く毎日を送っていたある日のこと、私は店番をしていた。でも、そこまで繁盛しているわけではないので、つい先程まで客が一人いただけで、あとは一向に来る気配がない。暇なので本でも読んでいると、目の前に五冊セットのノートが置かれ、声をかけられた。

「これ、お願いします」

顔をあげると、そこには、同い年くらいの女の子がいた。いつの間に入ってきたのだろう。不思議に思いながらも本を閉じ、接客をする。

「割引価格で四百八十円です。ありがとうございます」

「あ、はい、こちらこそ……あ、これカワイイ」

彼女の目を引いたのは、あのネギ型シャープペンシルだった。いつも持ち歩いているのだ。

「そのシャープペンカワイイよね。発想も面白いし」

驚いた。面白いや、変なの、と言われたことはあるが、可愛いと言われることなどなかったからだ。

「ねえ、これどこで買ったの？」

彼女はさらに食いついてくる。

「これは母からもらったものだけど……」

「そっかあ。売ってないんだね、残念。でも、カワイイからまた見せてもらおうかな。それじゃあ、ありがとうございます」

そう言っ、彼女は長いポニーテールを揺らしながら帰っていった。また見せてもらうって言ってたけど……名前も知らないじゃん。どうするんだろう。でも、不思議なことに、私は少し嬉しい気持ちになっていた。母のシャープペンシルを褒められたからだろうか。私は、彼女とまた話してみたいと思った。

彼女がまた来たのはあれから三日後。その次に来たのはその日からさらに四日後。そのたびに、毎回ペンや消しゴムなどの文房具を買っていくものだから、いったいどれだけ文房具の消費率が高いんだ、と思ってしまうた。

でも、私はさして気にならなかった。彼女と話しているときは楽しかったし、来てくれるだけで嬉しかった。こんなに楽しく人と話したのはどれくらいぶりだろう。自分でも驚いていた。でも、それ以上に日記の色がどんどん変わっていくのが分かる。あんなに黒く染まっていたのに、元のパステルピンクに戻っていたのだ。それだけじゃない。笑いのたえない日には、鮮やかなピンクや黄色に染まっていた。きつと、彼女には周りを明るくする力があるのだろう。あんなに不愛想だった私に、笑顔を咲かせたのだから。

ある日のこと、商品の仕入れから戻ってきた叔父が、声をかけてきた。

「仲良くやってみたいだね。よかったよ、こずえちゃんに友だちができてさ」

「こずえちゃん？」

彼女が不思議そうな顔をする。あれ、私のことだけど……。

「こずえちゃんは僕の姪で、今そこにいるよ……？ あ、もしかして、まだ自己紹介とかしてないの!？」

そうだった！ まだお互いの名前すら知らなかった。あんなに話し込んでいたのに。

「今さらな感じだけど。あたし、柴田楓」

「私は大沢こずえ。えっと……柴田さん？」

「ヤダなく、名字で呼ばないでよ。他人行儀みたいじゃん。あたしも名前で呼ぶからさ」

「あ、じゃあ、楓ちゃん……よろしく」

「よろしくね、こずえちゃん」

そして、お互いに顔を見合わせて笑った。

この日をきっかけに、もっと仲良くなれた気がする。ここで育んだ友情を、もっと深められた気がする。でも……。

その友情は長くは続かなかった。

その日も、私たちはネギ型シャープペンシルの話で盛り上がっていた。でも、どこことなく彼女の顔が暗い。歯切れも悪い。私は思い切って尋ねてみた。すると、

「あたしね、言わなきゃいけないことがあるんだ。実は……お父さんの仕事の都合で、引っ越すことになったの」

「え……」

言葉が出なかった。あんなに仲良くなれたのに……。

「あたしも、本当は引越したくないんだけど、どうしても無理みたいで……」

「そっか……。寂しいけど、それじゃ仕方ないね」

「うん……。あ、あたし、引越しの準備しなきゃいけないから、もう帰るね」

そう言って、彼女は帰っていった。でも、私はしばらくそこから動くことができなかった。ショックの大ききで、心が打ちひしがれてしまったから。心に穴が開いたみたいって、こういうことをいうのかもしれない。その日の日記は、涙と深い悲しみの、水色と深い青色の乱れ模様だった。

そして――。

とうとう、彼女が引越す日が来てしまった。彼女の引越しの話聞いてからは、ずっとふさぎこんでいたが、せめて見送りのときくらいは笑顔でいないと。

「こずえちゃん、今までありがとう。あつというまだったけど、楽しかったよ」

「こっちこそ、ありがとう。また、会えるよね」

「うん！ あ、そろそろ行かないと……」

「ちょっと待って」

私は、彼女を引き止めた。そして、あるものを渡す。

「はい、これ。引越し祝ってヤツ？ 用意してみたの」

「わあ、ありがとう。今開けてもいい？」

「え、あ、うん」

彼女は、包みを開けた。中から出てきたものは――

「これ……」

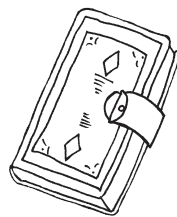
彼女は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに、花が開いたときのような明るい笑顔になった。「すごく嬉しい、大切にする。だって、私たちの友情の証だもんね！ ……あ、もう行かない。本当にありがとう、こずえちゃん……じゃなくて、こずえ!!」

「あ……!! 楓、こっちこそ、本当にありがとう!! 連絡取り合おうね、また会おうね！」

そして、彼女は車に乗って行ってしまった。
私は、その車が見えなくなるまで手を振り続けた。

その夜、私は日記の前で笑っていた。彼女が「友情の証」と言ってくれたからだ。私は、ネギ型シャープペンシルを手を取った。今頃、彼女もこれを見ているのだろうか……。そう。彼女に渡したものの、それは、あのネギ型シャープペンシルだった。だって、私と彼女を、いや楓を、繋いでくれるものだから。母の形見でもあるけれど、それよりももっと大きな意味をもつ「友情シャープペンシル」なのだから――。

今日も私は、ネギ型シャープペンシルを握りしめて机に向かった。きっと、今日の日記は、今までで一番素敵な色になるだろう。



”新しい“だけじゃない街 竹森みえ



「あっ。水上ビルが映ってるじゃん！」

ドラマのロケで水上ビルの通りが使われていた。画面の背面に狭間公園も映り込む。

そういえば、初めて狭間公園へ行ったのは中学の学校行事の集場所で、その時に、あのお店を見つけたんだっけ……。黒人のイラストにアルファベットの太文字のSUSHI BARと描かれた看板。

SUSHI BAR……当時、アメリカで流行はやっていた変わったネタのお寿司が出るお店だ。

「豊橋にも流行はやりのお店があるんだ……」とスゴク衝撃を受けた。

SUSHI BAR……。どんな人がやっているんだろ……。まさか外人さん??

どんなお寿司が食べれるんだろ……。やっぱテレビで知ったアボカドロールだろか……。水上ビルの一歩の印象と云うと、このお店で、この日もドラマを観ながら思い出していた。

でもこのお店は、目撃から一年後には無くなっていましたので夢か何だか判らなくなっていたので、ずっと話さずにいた。

それから四半世紀以上経った現在いま、水上ビルでの『小説執筆ワークショップ』に参加を

し、頭の中から出すことにした。けど、執筆中に妄想だけで書こうか、調べた方が良いのか考えていたら筆がピタリと止まってしまったので、後日、年上の友人に会い、お店のことを聞いてみることに。

友人は笑いながら、「一度、行ったんだよね」意外な返事にスゴく驚いたけど、思わず「えーっ！ マジ？ 私、めちゃめちゃ気になってたけど、翌年にはお店が無くて幻のお店だったの……」

「お店の名前は憶おぼえてないけど、アボカドロールに大笑いしたよー」と友人。

現在いまでは、スーパーでも普通に売られているアボカドロール。けど、当時（八十年代半ば）は、超斬新な太巻きで、アメリカで流行はやっているお寿司だった。

友人は、アボカドロールを食べたことしか覚えてない。と云うことだったので、翌月、図書館で調べることに。図書館では、当時の豊橋の若者が読んでいた地方誌『とよはしっ子』を一ページ一ページ、隅から隅までとにかく調べた。

SUSHI BAR……SUSHI BAR……SUSHI BAR……

あっ、あったあった。探していたSUSHI BARの文字。思いつき顔がゆるみ、ニタニ

タしている自分がいることが分かった。

本当に存在していたお店だったんだ。心の片隅では夢の中のお店だと思っていたけど、幻ではなく、夢オチで書きおわることもなくなったのだ。と云うことで、備忘録として、お店のことを綴っちゃいます！

お店の名前は、『SUSHI BAR 車』くるま 水上ビルという人もいるけど豊橋ビルの中辺りに、一九四八年十一月頃から一年半くらい実在していた飲食店。

週末は、予約が必要なほどの盛況ぶり。

店内は、黒とシルバークレイでシックに施され、天井にある瓢箪型のくり抜きからはライトの灯りもれる。その空間の二台のモニターからはマイケル・ジャクソンのPVが流れ、時のBGMがJazzだ。

メニューは、アメリカンロール・手巻き寿司・お造り・サラダ・盛り合わせ寿司・豆腐寿司——中略——アメリカン感覚なロールもの。牛肉や塩辛を豆腐にのせた豊腐寿司も珍味。

ん?! 豆腐寿司に豊腐寿司……

豊腐寿司は、現在の流行りの回転寿司屋さんにありそうな変わりネタ軍艦でシャリが豆腐??

寝ぼけてて、夢なのか現実なのか判らなくなることってあるでしょ? もしかしたら、SUSHI BARも、その類?? と思うこともあったけど、いざ見つけたら、すごい斬新なメニューがあった。スゴく食べてみたくなったけど、お店は無い。なので斬新なメニューは未知な味として再び頭の中へ。

何だよ何だよ……やっぱり幻かも?? と思っていたことは幻で終わるのね……

私は、ワークシヨップ当日、豊橋のまちの魅力を「一行」で紹介して下さい。と云う質問に「進化と退化を繰り返す蟬の抜け殻」と答えただけど、そんな感じで終わった気がした。

進化した駅前も、古くなった駅前も両方あって
イイじゃん。それが豊橋なんだから。

